

ボランティア・市民活動を広げ、応援する！

ネットワーク

Network

NO.376 2022年

2月号

特集

語り合う先に場をつくる

セルフヘルプという力 第30回

加納由絵さん

何もわからなかった時はひたすらつらかった
～DVや虐待は身体的暴力だけじゃない

東京ボランティア・市民活動センター

40周年スペシャル PART2

全国音訳ボランティアネットワーク

いいものみい～つけた！ vol.35

NPO法人生活支援センター207

あとリエトントン・第2あとリエトントン
トントンメイドな革工芸！

2021年 ボランティア・

NPO・市民活動をめぐる動き



深める

ボランティア・市民活動に役立つ視点や情報をお届けします。



語り合う先に場をつくる

- 3 **寄稿** 人の気配がするところ
◇加藤 亮子 芝の家
- 8 **寄稿** 気持ちのいい人間関係って、なんだろう。
若者が集い、育つ、「きっかけ」の場所
◇磯田 浩司 NPO 法人 グッド
- 13 **寄稿** 収穫には立ち会えないかもしれませんが、沢山の種を蒔きたい
◇高橋 孔明 ちよとも

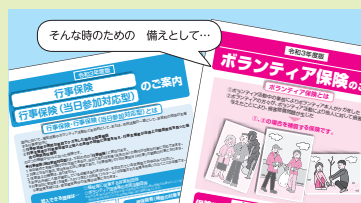
知る

ボランティア・市民活動のさまざまな形やボランティアに一歩ふみだすヒントを、ご紹介します。

- 15 2021年 ボランティア・NPO・市民活動をめぐる動き
- 17 TVAC News vol.12 東京ボランティア・市民活動センターの事業から
シンポジウム「これからのボランティア・市民活動 ～コロナ後の新たな展開へ～」
「災害時のための市民協働 東京憲章」を読み解く
- 20 つぶやきブレイク vol.21 やっぱり動物が好き
- 21 東京ボランティア・市民活動センター 40周年スペシャル PART2
～変わりゆく社会とボランティア・市民活動～
音訳を通して社会を変える ～視覚障害のある方に寄り添い続けて～
◇藤田 晶子 全国音訳ボランティアネットワーク代表
- 23 セルフヘルプという力 第30回 何もわからなかった時はひたすらつらかった
～DVや虐待は身体的暴力だけじゃない～
加納 由絵さん
- 26 いいものみい～つけた！ vol.35 NPO 法人 生活支援センター 207
あとリエトントン・第2あとリエトントン
トントンメイドな革工芸！

もしもボランティア活動中に怪我をしたら… 怪我をさせたり、物を壊したら…

※ボランティア保険および行事保険の加入は、東京都内の各区市町村のボランティアセンターまたは東京都社会福祉協議会窓口で手続きができます。



東京都社会福祉協議会指定生損保代理店
有限会社 東京福祉企画

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂1-2
研究社英語センタービル 3階

TEL 03-3268-0910
FAX 03-3268-8832
URL <http://www.tokyo-fk.com/>

特集

語り合う先に 場をつくる

以前の地域コミュニティには、たまり場や井戸端会議など、自然に人と関わったり、コミュニケーションをとる場がありました。

現在、主に都会では、周囲が困りごとを持つ人に気づかなかったり、地域や社会の問題が見えづらくなっています。こうした状況を踏まえ、さまざまな人が行き交い、集い、語り合える場づくりを行う市民活動があります。

今号では、三者三様の場づくりを行っている、芝の家、NPO 法人グッド、ちよとものみなさんに寄稿をいただきました。現場のリアルな声からは、多様な人とかかわるうちに周囲に対する関心や他者への思いやりが芽生え、^{うかが}培われるものであることを窺い知ることができます。自ら歩み出すまでの時間を許容する、ささやかな試みは、効率を優先し数で推し量る社会に一石を投じているのではないのでしょうか。





寄稿

人の気配がするところ

加藤亮子（芝の家）

「芝の家ってどんなところ？」

「そう聞かれると、一言で表すのは難しいのよ」と常連のおばあちゃん。「私ね、ここをお友達に紹介するとき、とにかくいろんな人に会えるのよ、思いも寄らない方にね、それが楽しいの、だからとにかく一度来てみてって言っちゃおうの」。スタッフも来場者も今日どんな人が来るのか、何が起こるのか毎日分からない。訪れる日毎に異なる風景が広がるそんな場所。

「ただいま」

駄菓子を買いたくて歩いて3分の自宅にお財布を取りに行った小学5年生がそう言いながら戻ってきた。すると「あ、思わずただいま〜って言っちゃった、家じゃないのに」と呟いている。そう、ここはまるで誰かの家で過ごすような、そんな佇まいのある居場所。

「つかれたらちょっと休ませて」

ランドセルを背負ったままいきなり縁側に寝転ぶ小学2年生。別の日には「ねえ、ゴムテープ頂戴」と開口一番。手には学校で作った牛乳パックの電車。持ち帰る途中で壊れかかり、その修理にここならゴムテープがあるはず、と立ち寄りたり、彼にとつて下校時のトイレや困りごと解決の立ち寄り場所。



(上) 縁側交流、小学1年生の2人が手にしているのはけん玉
 (右上) 花や野菜の苗が生き生きとした軒先、園芸からの交流も盛ん
 (右) 玄関から見る室内、入り口では図書の貸し出しや駄菓子販売も
 (下) 旧拠点、2008年～2018年の10年を過ごした場
 (写真提供:すべて芝の家)



「はじまり

2008(平成20)年10月、場所は、東京タワーのふもと、田町のオフィス街から少し外れた昔ながらのまちなみが残る一角、港区芝3丁目の住宅街。3階建てのアパートの1階部分を古民家風にリノベーションしその「家」は誕生しました。

港区芝地区総合支所と近隣にキャンパスのある慶應義塾大学が協働して取り組むプロジェクト「昭和の地域力再発見事業*」。希薄化する住民間のつながり、という芝地区の区民参加型政策会議で挙げた課題を起点に、コミュニティの再生を目的とした実験的な常設型地域交流拠点事業が始まりました。

既存の「町会・自治会」とはまた違った切り口からのまちづくり活動の試み。キックオフの集いでは、まず拠点の名前を、まちに関わる様々な人で案を出し合って決めました。「まちの灯火」子どもにとっても大人にとっても灯台のような温かな場所、学び場のようなイメージから「芝の寺子屋」なども挙げられた中、

最終的に一番シンプルな「芝の家」が選ばれました。

「どんな居場所？」

区役所は枠組み・予算を、大学側からは最初の3年間人材を提供し運営の中身を研究・提案した。そのコンセプトは「プログラムありきではなく、誰もが気楽に立ち寄り、その人らしく思い思いの時間を過ごせる、ホッとする居場所を作りたい」。そんな思いに共感する人がボランティアに集い、場づくりを積み重ねてきました。13年経った今、本当にこの「芝の家」という名前がしつくりくることを、このコミュニティスペースを訪れる誰もが実感しています。



*開設当初の事業名。現在は「地域をつなぐ! 交流の場づくりプロジェクト」。



(上) 宿題をする子、クイズを出す子、ゲームをする子、異年齢がちゃぶ台に同居する
 (右上) 親子で来場、藍の生葉染めワークショップを旧拠点にて
 (右) 近所の人、遠方からの人がいい感じに混じり合う



場づくりの一步は、まず人(スタッフ)がいて場を開けてみる、そのことから。近隣に暮らす方の期待やニーズを聞き取ったり、通行する人に声をかけたり。開所する時間帯による変化を探ってみたり、入場するきっかけになるイベントを仕掛けてみたり。まちづくり・コミュニティ活動についての勉強会を開催してみたり。植物を育て、その世話を共にすることで会話の機会が増えたり。

週2〜3日の開室からスタート、次第に週6日、1日5時間という開室スタイルが確立され、時間帯は11時〜16時、13時〜18時という2パターンで、様々な世代のそれぞれのニーズを取り入れました。その後週6日はスタッフの負担が大きく地域での知名度も上がったので、6年目からは週5日(日月休み)に変更。時間帯は、12時〜17時で毎日統一した時期を経て、最近は平日は11時〜16時、土曜日は12時〜17時が定着しています。こうして、開室する時間帯一つとっても手探りで時に見直しを加えながら、多世代がそれぞれに居心地の良い居場所づくりを、多世代のボランティアスタッフ・運営スタッフが知恵と真心を出し合い日々を積み重ね、13年が経ちました。

開所から13年を経て

その間、社会の変化もいろいろありました。大きな出来事としては2011年3月の東日本大震災。コミュニティの力、誰かとのおしゃべり、人と人とのつながりが欠けることで人はどんなにか生きる力を失ってしまいかを目の当たりにし、社会全体で「つながり」に意識が向けられるようになりました。

開所当初はプログラムや対象年齢が定まっていなかった公共の交流拠点が珍しく、枠組みのゆるやかさや行政らしくないその雰囲気、違和感を感じる方も多くありましたが、今では「地域の居場所」「コミュニティスペース」という言葉もすっかり自然に受け入れられ、「芝の家」のような場も広く浸透してきたことを実感しています。

「わー、今日初めて人にこのこと話した、話せた」

高校1年生のFちゃん。自分でもびっくりした様子で長い間一人で抱えてきたことを話してくれた。小学生の頃から来場していたその子は、

【日誌】○月×日の芝の家

—————日々起きることを、とある一日の日誌として書いてみました。

- 10時20分 今日のお当番スタッフAさん到着。向かいのNさん「オクラの花、咲いたね?」。
- 10時25分 お隣りのSさん縁側に腰掛けてデイサービス迎いの車待ち。Aさんと挨拶。
- 10時27分 もう1人のお当番スタッフCさん到着。
- 10時30分 オープン準備 玄関に看板、ご自由にボックスと呼んでいるリサイクル品を入れた箱を縁側に並べたり、お湯を沸かしお茶を準備したり。
- 10時40分 今日のお当番メンバー2人で「チェックイン」。今日1日芝の家で一緒に過ごす仲間同士で、体調や過ごし方を伝え合い、芝の家の来訪者やイベントなど予定も共有する。
- 11時 オープン
- 11時10分 「豚汁たくさん作ったからお鍋かして」同じ通りのYさんから差し入れ。
- 11時30分 縁側のご自由にボックス（無料のリサイクルコーナー）に立ち寄る方。今日は散歩の途中で偶然通りかかったそう。新品の布製バッグに出会い「ラッキー」と喜んで帰られる。
- 11時50分 図書館で芝の家カレンダーをもらったという方が初めて来場。スタッフとしばらく玄関先で立ち話「せっかくだから入ってみませんか」。
- 12時10分 近くにお勤めの方がお弁当を持って来場。ソファ席に座って静かに昼食。
- 12時20分 スタッフも昼食。
- 12時40分 お勤めの方に話しかける。お勤めのランチ場所などで盛り上がる。「公園以外に職場の外でお弁当を食べられる場所があるのはありがたい」。
- 13時15分 そろそろ小学生が下校し始める頃、スタッフCさん、通りに出てけん玉。
- 13時30分 今日は早めに下校する曜日。ご自由にボックスを覗く子、スタッフに話しかける子。けん玉をする子。
- 13時40分 大学生、授業で紹介されてレポート課題があり見学のため来場。2人で。
- 14時10分 「今日はサッカー教室がない日」小2の子が遊びに来る。大学生のお兄ちゃんを見つけて早速嬉しそうに話しかける。
- 14時20分 小学生、大学生、スタッフでベーゴマ。初来場の大学生のお兄ちゃんに紐の巻き方を教える常連の小学生。
- 14時30分 常連のおばあちゃん「来ちゃった?」。折り紙で作った季節の飾りを持って。
- 14時45分 初来場の大学生、おばあちゃんに折り紙を誘われて一緒にちゃぶ台を囲む。
- 15時 珍しく中3の子が立ち寄る。友人と待ち合わせの様子。
- 15時10分 中学生2人、奥のテーブルで宿題を広げる。
- 15時20分 近所の小2の子、おじいちゃんと駄菓子を買いに。
- 15時40分 犬の散歩の途中、Nさん玄関に立ち寄り。
- 15時45分 「そろそろ16時なので、片付けを?」とAさんが声かけ。日誌をまとめる。
- 15時55分 「またね?」、「今日はありがとう」、「最後に駄菓子買ってもいい?」
- 16時 クローズ
- 16時10分 最後の方も退室。室内掃除機、家具やおもちゃを拭いたりトイレ掃除など。
- 16時30分 チェックアウト、今日1日のふりかえり。その日の当番スタッフで良かったこと、気になったことを交わし合う。この日は駄菓子のこと意見を出し、早速明日から変更してみることに。
- 17時15分 スタッフ退室。



(右) 芝の家13周年を記念して開催した「いろはにほへっと芝まつり」旧拠点がはらっぱに生まれ変わりまた人が集う場に。
 (右下)「いろはにさんぽ」まちあるき、芝の家が面する通りは「いろは通り」と呼ばれ、かつてはたくさんの商店で賑わっていたそう。



その日ほんの少し肩の荷を降ろせたようにみえました。

顔なじみスタッフ2〜3人とのゆったりとした時間の中で、進路の話がきっかけで家族の悩みを吐露したFちゃん。この会話を通して気がついたことがあります。

「ここは、気にかけてくれる人がいる場所・自分を出してもいい場所。家族ではない、友人とも少し違う、でも親しみを感じて言葉を交わし合える他者がいる場所」そんな役割が

あるのだなあ、ということですが。忙しい社会の中で埋れがちな一人ひとりが抱える悩み。それは日々の小さなものから、自分だけの力では簡単には取り除けないものだったり。

悩みの大きい小さいに関わらず、それに一人で向き合うことよりも、時には誰かに話してみる、あるいは逃げてみる、離れてみることも必要だったり。こんな話し、家族や友人など近い人には話せない、かといって誰か他の人に話すことでもない、と思っ

ていても、自分を受け入れてくれる他者が隣にいと、ふっと人は話したくなるのかもしれない。

言葉に出してみることで、心が一瞬でもほぐれたり、固まっていた視点がふっと切り替わったり、心に新しい風が吹き込まれ、ふっと心が軽くなったり。

悩みを語るだけでなく、見知らぬ誰かとの何気ない会話により日常から少し離れ、心が弾んだりすることもあるのではないのでしょうか。

1日の中にそんな瞬間が少しでもあるだけで、人は「生き心地」が良くなるのだと思います。「あ、今日ここに来てよかったな」そんなふうに思える日常を増やしていったら。小さな居場所の小さな実践が、社会の一角を少しでも明るくし、幸せを運ぶことができたら。

そんな願いを持ちながら、芝の家は今日も誰かを待ち受けています。「はじめまして」「ひさしぶり」「おかえり」「ただいま」そんな言葉が似合う場所、初めての人もいつもの人もそれぞれに温かく迎え入れる場所、それが「芝の家」です。



加藤亮子(かとう・あきこ)

2008年芝の家立ち上げよりボランティアスタッフとして関わる。2014年から運営スタッフとして現場の切り盛り役を務め9年。子どもたちの成長、そして久しぶりの再訪が嬉しいこの頃。前職は幼稚園の教員。

芝の家
 地域をつなぐ！
 交流の場づくり
 プロジェクト



寄稿

気持ちのいい人間関係って、なんだろう。 若者が集い、育つ、「きっかけ」の場所

磯田浩司 (NPO 法人グッド 代表)

「居心地がよくて、初めて来た気がしない。なんだか落ち着きますね」
初めてここを訪れる人が、よく口にする言葉だ。団体立ち上げから22年。人や形が変化しながらも、この場所が大切にしていることはずっと変わらない。

不登校やひきこもり経験のある若者たち、大学生や教員、保育士、ITエンジニアなど、個性豊かな職や経歴の持ち主が、併設される寮やシェアハウスで暮らしている。フリースペースには日々、大学生や自立を目指す若者たちが集い、その合間を縫って、まだ幼いスタッフの子供達が行き回る。夕飯時になると、おかげのいい匂いが漂い、初めての人も10年ぶりにやってきた人も、一緒にテーブルを囲む。コロナ禍以前は日本全国、そして世界各地から、さらに多くの人たちが、年齢も学歴も職業も関係なく、入れ替わり立ち替わりやってきていた。スタッフは全員住み込み、おはようからおやすみまで、どんな悩みや相談にもとことん付き合い、目の前の人と人間臭く、向き合い続ける。寝食を共にし、泣き、笑い、語らう。そんな毎日づくりの場が、NPO法人「グッド」の事務

所である。

「この不思議な場所ができるまで」

グッドは、ワークキャンプ・フリースペース・共同生活寮の3つの事業を通して、「若者のきっかけづくり」を続けている団体である。設立は2001年。小さな任意団体としてスタートした。自分は何をして生きていくのか。営業マンとして働きたいから、NGO活動に参加しながら、そして世界中を旅しながら、考え続けていた私は、26歳の時、今は無き日本青年奉仕協会の「ボランティア365」というプログラムに出会った。若者が全国の課題のある場所に赴き、1年間、ボランティアとして活動する。私が活動先として選んだのは、大分県にある全寮制の高校だった。

全校生徒300人中200人が元不登校、という一風変わったその学校の寮に住み込み、日中は英語や体育の先生、夜は寮の舎監として過ごした。そこで私が出会ったのは、赴任前に想像していたような「問題のある困った生徒たち」ではなかった。彼らは日本社会の学校という仕組みの中で、常に空気を読み、求められる自分像を必死に演じながら、それ

* わたしのきっかけ *

(ソウヤ／寮生／20歳)

中学校も高校も、不登校気味だった。家で一人、アニメやYouTubeを見て過ごしてた。

18歳で参加した静岡にある牧場でのプログラム。初めは名前もろくに言えなかった。それでも、みんなが優しく、一緒に働いて、ご飯食べて、遊んで…。気づいたら、楽しんでいる自分にびっくりした。そして、キャンプ地からそのままグッドの寮に行くことに決めた。

ここは、起きてから寝るまでずっと人がいる。時々億劫になるけど、その分変化も大きい。人と普通に話せるようになった。めちゃくちゃ嫌だったのに、バイトも始めた。

グッドには、面白くて、話が合って、ふざけ合える人たちがいる。とても大切な場所。



(リサコ／スタッフ／26歳)

学生時代、グッドでたくさんの人と出会い、「今のままじゃ人生はつまらない」と教わった。大学卒業後、専門学校
の広報担当として働く中で、小さな世界しか知らずに進路を選択する高校生達の姿に、もっと多様な経験をしてほしいと何度も思った。そんな思いを胸に、このNPOの世界に飛び込んだ。

炊事洗濯・掃除から事務に人生相談、キャンプ引率と、業務内容は多岐に亘る。人との関わり方に正解はないし、手探りの毎日だ。人の人生に関わる仕事だからこそ、嬉しいことも悔しいことも、かつてよりうんと増えた。まだまだ未熟な私だが、一人でも多くの若者が「人生って面白い」と思えるようなきっかけを掴めるよう、自分にできることをやっていきたい。

でもその枠からはみ出してしまった、ごく普通の若者たちだった。彼らと暮らす中で、学校に行けなくなることは誰にでも起こりえるのだということ、そして、一度そういう状況になると、元のレールに戻ることはたやすいことではないのだ、ということを実感した。

長期休暇中、校長の計らいで、全国の若者支援の現場を見に行く機会を得た私は、全国の施設を回り、たくさんの方の不登校やひきこもり経験のある若者たちと出会った。そして、その若者たちの多様さに比して、支援の現場や選択肢のあまりに少ない状況に驚いた。私は、彼らのためにどんなことができるのだろうか。気になったのは、ことあるごとに「だるい・きつい・面倒くさい」とネガティブな言葉を発し、「自分なんて」「どうせ無理だ」と、挑戦しようとしていない生徒たちの姿だった。どうすれば、彼らが胸を張って生きていけるようになるのか。脳裏に浮かんだのは、私が旅したアジアの国々で出会った人々の姿だった。

を胸に、活動終了後、卒業した教え子と、大学生や社会人のボランティア仲間たちに声をかけ、タイの東北部を訪れた。村人と共に汗を流し、ホームステイしながら異文化を体感する。食べたことのないものを食べ、川で水浴びをして、見たこともないような満天の星を見上げながら語り合う。「人前で心の底から笑ったのは、いつぶりだろう」「自分の本音を話したのは初めてかもしれない」「自分ももっと変わりたい」そんなふうに語りだしたのは、不登校だった私の教え子たちだけではなかった。プログラムを手伝いたい、と名乗りを上げてくれた大学生や社会人だった参加者たちも、同様に大きく変化していった。いろんな人間が混ざることの大切さ、そして、この体験はすべての若者に効くのだ、という確信。いい出会いと、安心して挑戦できる場があれば、人は変わる。あれが、これまで170回以上続けてきた、「ワークキャンプ」の原型だ。

「本音で話せる」場を作りたい

第1回目のワークキャンプを終え、帰国した私は、長いこと空き家になっていた親戚の古い平屋の一軒家を借り受け、そこを事務所にして



コロナ禍前に実施したスリランカキャンプの風景。井戸掘りワークでの土運び。若者が村人と共に汗を流す。
(写真提供はすべてNPO法人グッド)

活動を始めた。夏はびつくりするくらい暑いし、冬は手がかじかんで動かないくらい冷える。毎日が、キャンプみたいな日々だった。キャンプ参加者の集まるフリースペースとして開放していたその事務所には、スタッフが住み込み、寮生が住むようになって、全国から、いつも誰かがやってきた。

そんな雰囲気は、大学時代の寮生活が大きなヒントになっていたのかもしれない。高校まで、学校だけの付き合いしか知らなかった私にとって、あの、大学の敷地内にある寮での生活は本当に刺激的だった。共用キッチンに集まって料理して、大浴場では裸の付き合いをし、毎晩のように誰かの部屋で、コーヒーや酒を飲みながら朝まで語り合う。毎日が修学旅行のようだった。人は見た目だけではわからないということ、そして、腹を割って話すことの難しさと面白さを思い知る日々だった。いろんな人間が交じり合い、本音で話ができるような「場」をいつか作りたい。そう友人たちに話していたのは、もう30年も前のことだ。

「大切にしたいこと」

その頃から、私が大切にしてく

たことがある。それは、「気持ちのいい人間関係」のある場所を作りたいということだ。なんとなく空気を読みあって、言いたいことも言えず、息が詰まってしまいうような関係ではなく、目の前の相手に興味を持ち、心配りをしながらも、肩の力が抜けている。いいところは、大いに褒め、おかしなところは、改善方法を示しながら、きちんと伝える。そんな当たり前のことができるところ。人はとかく、マイナスでつながりたがるものである。人の陰口で盛り上がったたり、愚痴を言い合っで慰めあったり。でも、そういう関係って、疲れてしまう。もしかすると、陰で自分のことも悪く言われているかもしれない。明日は自分が仲間外れにされてしまうかもしれない。学校でも職場でも、今の若者たちはそんなヒリヒリした世界を、どうにか生き抜いてきているのだ。一ヶ所くらい、安心してみんな夢を語れるような、信頼できる仲間のいる場所があってもいいではないか。

人生のどこかで、人間関係に苦しんだ人には、ここでは決して、同じような思いをして欲しくない。スタッフにも住人や参加者たちにも伝え続けていること、それはとてもシ



(上) 手作りの二段ベッドがある共同生活寮。寝食を共にすることで、若者たちは成長していく。

(左) 毎日、食卓を囲み、自然と交流が生まれるフリースペース。現在も感染対策を徹底しながら、若者たちを受け入れている。

ンブルなことだ。挨拶をすること。感謝の気持ちを伝えること。初めて来た人に、この場所がどう見えているのか、今、目の前の相手はどんな気持ちでいるのか、想像すること。相手の思いに耳を澄ませること。そして、自分のできることは、損得考えずに率先して行うこと。初めは難しいことのように思えるが、やってみると、心地よい。その感覚は、ここで暮らす人たちが関わる学生たちに少しずつ沁みつき、広がっていく。食事やイベントの後、どんなに盛り上がりつつも、「そろそろ片付けようか」の一言で、びっくりするくらい迅速に全員が動いて、どんな場所も一瞬で片付けてしまう。「ありがとう」「先行くね」「やっつくとくよ」をお願いします」気持ちの良い挨拶が飛び交い、生ごみの処理やトイレの掃除にも、皆にこやかに取り組む。何をしたらいいかかわからず戸惑う人のところには、さりげなく誰かが話しかけに行き、そっと寄り添う。そんな姿を見て、次は自分がそうしたいと、次世代が憧れ、育っていく。誰が来ても、居心地よく感じてもらえる空間は、そうして脈々と受け継がれてきているのだ。



日々の炊事・洗濯はもちろん、園芸作業や梅干しづくりなど、みんなで一緒に作業を行うことで自然と距離が縮まっていく。

「グッドって、どんな場所？」

ここに集う若者たちはこの場所をどんなふう感じているのだろうか。ここに関わる若者たちに聞いてみた。

——第二の家族みたいな感じ。落ち着くし、居心地がいい。初めて来たときも自分のことを気遣ってくれて、困らないように誰かが近くにいてく

れて。一人で気まずい、居づらいつか全くなかった。一人でやると面倒な炊事や洗濯も、誰かとやると不思議と楽しい。普通の大学生活では会えないような人たちもたくさんいて、行くたびに新しい発見がある。(大学生／20歳)

——自分が自分でいられる場所。優等生気質の私は、人前ではひたすら

ニコニコして感情を隠して、一人になつたらぐったりと疲れていた。でもグッドで人と話して、ありのままの自分でいられるようになって、自分って本当は人との関わりが好きなんだなって感じられるようになった。(大学生／22歳)

——ここには、ただ表面だけを見ているんじゃない、本気で関わってくれる人がたくさんいる。良いことだけじゃなくて、時に厳しいことも本音で伝えてくれる。社会に出ると、この環境がどれだけ特別で稀有な場所なのか、よくわかる。こんなに自分と向き合ってくれる人たちはいないな、って思う。(社会人／24歳)

「これからも」

自分の世界を大きく広げる若者時



磯田浩司(いそだ・こうじ)

NPO法人グッド代表理事。大学卒業後、一般企業就職を経て国際NGO活動や日本国内でのNPO、ボランティア活動に数多く参加。2001年不登校・ひきこもり経験者を含む全ての若者を対象にきっかけづくりの活動を行う任意団体、グッドを設立。

代。そこに新型コロナウイルスが及ぼした影響は計り知れない。人と会えない、関われない。そんな非人間的な生活を強いられた大学生・若者達が全国に数百万人いる。今この瞬間もオンラインで授業を受けながら、一人孤独を耐え忍んでいる学生がいることを想像すると、胸が痛む。

人は、他人の中で育つ。他者との関わりの中で自らを発見し、自分の人生を歩み始める。

新型コロナウイルスによる制限や分断によって、私たちが大切にしてきた、泥臭い、密な人間関係の重要性を改めて感じずにはいられない。ワークキャンプもできず、密を避けろと声高に叫ばれるこの時代の流れをきちんと見つめながらも、どうかして、この場所を守り続けていきたい。

NPO法人
good!
(グッド)



No.

生が感じの良い方で、それで始めてみようって
思ったのよ』

b『それはすごいわ！初めて見てどんな感じ？』

a『所作の一つ一つに意味があって、あっ！実は
お茶を通して心のやり取りをするのよね。それ
が発見で日本って素晴らしいなあなんて思って
みちゃったりしたのよね』

b『お茶でそこまで深く感じたりするのね。何だ
か羨ましいわ、私も最近お腹が気になってきて
て、ダンスでも始めようかしら』

今回は文字数の制限があるのであまり書きすぎると
会話だけで終わってしまいそうなので、このく
らいで（笑）。例は極端ではありますが、相手が
話を聴いてくれると会話も弾んで気づきも多く生
まれてきます。

ちよともは、自由におしゃべりできる多世代交流
の場ではありますが、一つだけ心がけている事が
あります。実はそれがちよとも最大の魅力であ
り、良さでもあります。それは私たちがまず聴く
という事です。ちよともでは参加者の方のお話を
先ずは聴く事を大切にやっています。目を見て、
耳を傾けて、心で話を聴いてもらうと話は弾みま
すし、思いもよらない気づきを得たりします。気
づきは人に元気を与えて、元気はその人生をより
豊かにしてくれるものだと思います。人に優
しくされると、恩返ししたくなる様に、話を聴い
てもらえると、他の人の話を聴いてあげられる様

ちよとも

ちよだボランティアセンターがひらいた
多世代交流の場「ちよとも」を引き継いで
2017年から活動する。千代田区在勤や
在住の多世代のメンバーが所属。
千代田区社会福祉協議会の
登録ボランティア団体。



になったり、そんなつながりがちよともの外で広
がっていくといいなあって思うんです。自分のお
腹が満たされていると、空腹の人にご飯を分けて
あげられる感じに少し似てますかね。ちよともに
参加してもらって、少しでもいい気持ちになっ
てもらって、その小さな良い変化がまた小さな良い
変化をつくり、その変化がまた良い変化を生み出
す。そうして目に見えないところで私たちはつな
がって、全体でコミュニケーションを取り合っ
ていると思うんです。

『収穫には立ち会えないかもしれませんが、沢山
の種を蒔きたい』

語り合う場の先には目にはみえないけれどその様な
成果がある事を信じて、その為のきっかけの一つ
になれたら良いなあと思いながら活動していま
す。コロナ禍で新しいチャレンジはたくさんあり
ますが、楽しみながらやって行きたいと思ってい
ます。是非お気軽に遊びに来てください。ご参加
お待ちしております ^_^

ちよとものみなさん。上左端が高橋孔明さん。
（写真提供：ちよとも）



No.

寄稿

DATE . . .

収穫には立ち会えないかもしれませんが、 沢山の種を蒔きたい

ちよとも 高橋孔明

ちよともは毎月、千代田区を中心に参加者が気軽におしゃべりができる多世代交流の場をつくる活動をしています。参加してくださった方々に新たな気づきやつながりができるといいなと思ってやっています。1番は私たちが楽しいからやっているということもありますが(笑)。この場を借りて、毎月テーマや企画を考えているメンバーや支えてくださる様々な方々に感謝をいたします。

さて2021年は、コロナ禍や緊急事態宣言などで、人とのつながりを持つ事が難しくなった年のように思います。僕は、福岡の田舎町出身で、子どもの頃は両親共働きで、近所のおばあちゃんの家でご飯を食べさせてもらったりしていました。雨が降れば洗濯を取り込んでくれたり、回覧板を回しにいった母親は1時間くらい話し込んで帰ってこなかった事もしょっちゅうありました。似たようなエピソードをお持ちの方もいらっしゃるかもしれません。

意図せずにあった交流の場が、近年の効率化・IT化で少なくなってきたように思います。またそういった背景からか、話を聴く人よりも話をしたい人たちの方が多いように感じています。自分の事をわかって欲しい、知って欲しい。承認欲求と呼ばれたりしますが、それは私が私として生まれた事の証明でもあるので、これはとても大切な欲求

です。しかしそれは、聴いてくれる人や受け止めてくれる環境があって成り立ち、その環境はとても大切だと思っています。

例えば、話したい人同士が会話すると会話にならない事もしばしばあります。それどころか喧嘩になってしまったり、余計にストレスになってしまったりする事もあります。

例をあげると、

- a 『私、先週から茶道を習い始めたの』
- b 『へえ、私は体を動かさような習い事したいわあ、ダンスとか、近所の人が始めたのよねー』
- a 『前から茶道に興味があって、所作なんか綺麗じゃない?』
- b 『私はダンスを習いたいわあ〜、お腹周りもスッキリしそうだし、どう思う?、そうだ!一緒にダンス習いましょうよ!』

a 『私は茶道にいきたいのよ』

これはこれで楽しそうではありますが(笑)、会話が弾んでいる感じはしないですね。

今度は話を聴いてくれる人と会話をしてみます。

- a 『私、先週から茶道を習い始めたの』
- b 『茶道習い始めたの? 何だか貴方にしては新しい感じがするわ、どんなきっかけがあったの?』
- a 『実は前から憧れていて私にはハードルが高いと思ったんだけど、何気なく見学に行ったら先

ボランティア・NPO・市民活動をめぐる動き

ボランティア・NPO・市民活動をめぐる動き

社会の動き

- ・クラウドファンディング最大手READYFORが「いのちとこころを守るSOS基金」を新設。新型コロナウイルスの影響で困窮する人などを支える団体の活動支援(6日) *
- ・シンポジウム「コロナ禍とボランティア・市民活動〜これまでとこれから〜」(30日) / TVAC *

1月

- ・米連邦議会議事堂にトランプ支持者らが乱入、ワシントンDCに戒厳令。トランプ大統領は扇動者として弾劾裁判へ(6日)
- ・東京の緊急事態宣言2回目(8日〜3月21日) *
- ・「核兵器禁止条約」が発効。国際条約としては初。50か国地域以上が批准(22日)

- ・多摩地域5大学と地域によるボランティア活動報告会&イベント「被災地と多摩地域の架け橋」(14日) / 多摩地区の大学と地域によるネットワーク

2月

- ・ミャンマー軍が軍事クーデターで政権を掌握。アウン・サン・スーチー氏を拘禁(1日)
- ・「社会的不安に寄り添い、深刻化する社会的な孤独・孤立の問題について総合的な対策を推進するため、内閣官房が「孤独・孤立対策担当室」を設置(19日)

- ・子育ての悩みや不安を電話で聴く「ママパライン」集中実施(15〜20日) / (N)子どもNPO・子ども劇場(全国センター)

- ・大久保公園でコロナ困窮者向け「女性による女性のための相談会」(13〜14日) *

3月

- ・東日本大震災から10年(11日)
- ・米アトランタ市でアジア人女性らを狙った銃撃事件。8人が死亡(16日)。ニューヨーク・ド・オーケランド市でアジア人ヘイトに抗議のデモ(27日)
- ・スエズ運河で日本企業所有のコンテナ船座礁。運河は3か月以上運航不能に(23日)
- ・世界経済フォーラムによる「ジェンダーギャップ指数2021」発表。男女格差の少ない順で日本は156カ国中120位(31日)

- ・中高生のボランティアグループ「VOLUME!!」のメンバーらによる「中学生・高校生ボランティアフェスティバル2021」初のオンライン開催(14日)
- ・練馬区の小学生8人による「チームNHYレモン」が渋谷区のカフェでレモネードのチャリティー販売会を開き、収益の大半を小児がん治療研究に寄付(21日)

- ・TVAC(旧「東京ボランティア・センター」)設立40周年(1日)

4月

- ・社会福祉法一部改正が施行。新事業「重層的支援体制整備事業」に注目が集まる(1日)
- ・高齢者への新型コロナウイルスワクチンの優先接種スタート(12日) *
- ・厚生労働省と文部科学省が、家族の介護や世話を担う子ども「ヤングケアラー」に関する初の実態調査結果を公表。中学2年生の5.7%が「世話している家族がいる」と回答(12日)
- ・東京の緊急事態宣言3回目(25日〜6月20日) *

- ・「アースデイ気候サミット2021」(22日) / アースデイ東京2021実行委員会
- ・「認」しんぐるまざあず・ふぉーらむがオンライン記者会見「新型コロナウイルスの影響によるシングルマザーの就労・生活調査」(25日) *

- ・「ヤングケアラー支援施策の確立に向けた声明」。ケアを担う子ども(ヤングケアラー)について、実効性ある支援策の確立をあらためて求める(7日) / (一)日本ケアラー連盟

5月

- ・与党、入管法改正法案提出を断念(18日)。LGBT新法も与党合意が取れず見送り(20日)
- ・改正温暖化対策推進法成立。2050年までに温暖化ガス排出量実質ゼロをめざす(26日)
- ・わいせつ教員対策新法成立。性暴力等で失効した教員免許の再交付却下が可能に(28日)

6月

- ・「新型コロナウイルス感染症生活困窮者自立支援金」相談コールセンター(14日) *
- ・最高裁、夫婦別姓を認めない民法戸籍法は合憲と判断。裁判官15人中11人が支持(23日)

- ・『心の病気の回復は家族の学びから―新宿フレレンズ50年の道のり』出版(14日) / 新宿区精神障害者家族会・新宿フレレンズ役員会

2021年

※字数節約のため正式呼称等を省略している場合があります。

【凡例】

(N)…NPO法人(認)…認定NPO法人(一)…一般社団法人(公)…公益社団法人
TVAC…東京ボランティア・市民活動センター。

「*」は新型コロナウイルス感染症に関する動きです。

- ・新型コロナ災害緊急アクション活動報告会&各政党との討論集会「コロナと貧困に殺される。政治はいますぐ公的責任を果たせ」(12日)／(一)反貧困ネットワーク*
- ・(N)キッズドアによる調査結果発表「年間収入200万円未満が65%、「貯蓄額10万円未満」は51%。困窮子育て世帯の87%が夏休み中の食事に不安(28日)
- ・不安定居住者のための支援情報サイト「すまこま」スタート。実施主体は厚生労働省、(N)ホームレス支援全国ネットワークが受託(28日)

- ・よりよいホットラインを運営する(一)社会的包摂サポートセンター「ChanKanプロジェクト」開始。生活困窮に陥っている若者と外国人を対象にした相談支援事業(1日)
- ・(N)日本ボランティアコーディネーター協会(JVCA)創立20周年。記念企画「JVCA二十歳の記念フォーラム」を開催(28日)

- ・インターネット上の中傷の根絶を目指す(N)Remember HANA設立記念イベント開催。SNSで誹謗中傷を受け自死したプロレスラー・木村花さんの母・響子さんら(3日)
- ・広島市の市民団体がシンポジウムを開催。検定教科書の「従軍慰安婦」記述訂正・削除を批判(25日)

- ・東京ののちの電話設立50年。ボランティア相談員による「いのちの電話」の草分け(1日)
- ・緊急避妊薬を処方箋なしに買える「スイッチOTC」化を求める要望書を厚生労働省に提出(4日)／緊急避妊薬の薬局での入手を実現する市民プロジェクト)
- ・(N)移住者と連帯する全国ネットワーク(移住連)が参院選に先立ち「移民政策に関する政党アンケート2021」の結果を公表(18日)

- ・体調不良のスリランカ人女性が入管施設で死亡した事件(3月)を受け、外国人DV被害者に対する適切な保護の徹底と対策の改善を求め、市民活動5団体が声明(11日)
- ・(認)シーズ+市民活動を支える制度をつくる会が解散。27年の活動に幕(5日)。事業は(N)セイエンが承継(15日)
- ・(N)日本NPOセンター設立25周年(22日)。記念シンポジウムをオンライン開催。

- ・TVAC、「大学・短大等における学生ボランティア活動支援連絡会」様々な危機と共存する時代に学生ボランティア活動をどう展開するか」オンライン開催(18日)
- ・「第1回全国(こども食堂実態調査」等で、把握できた全国のこども食堂の数は前年より大幅増の6007か所に(21日)／(認)全国こども食堂支援センター・むすびこ
- ・NPO「年越し大人食堂2022」実施。無料の生活・医療相談も(30日・1月3日)

7月

- ・熱海市伊豆山地区で大規模な土砂災害が発生。死者・行方不明者27人、損壊家屋多数(3日)
- ・東京の緊急事態宣言4回目(12日〜9月30日)*
- ・中国・河南洪水、千年に1度規模の豪雨で死者多数。欧でも記録的豪雨による洪水(中旬)
- ・東京オリンピック開催。日程の延期、無観客開催は近代五輪史上初(23日〜8月8日)
- ・トルコ、ギリシャ、米カリフォルニアやロシアで高温乾燥により大規模森林火災(〜8月)

8月

- ・感染者が世界全体で2億人超え。ジョンズ・ホプキンス大学による集計で(5日)*
- ・スリランカ人女性死亡事件を受け、出入国在留管理庁が局長ら4人を処分(10日)
- ・令和3年8月の大雨。西日本を中心に大雨被害(11〜21日)
- ・タリバンがアフガニスタン掌握。女性の教育・社会生活に脅威(15日)。米軍20年ぶりに撤退。

9月

- ・東京パラリンピック開催(8月24日〜5日)
- ・医療的ケア児支援法施行。国や地方公共団体は、医療的ケア児とその家族の支援にかかる施策を実施する責務を負う(18日)

10月

- ・菅内閣の任期満了を受け岸田内閣が発足(4日)
- ・小笠原諸島付近で噴火した海底火山で発生したとみられる大量の軽石が沖繩本島などに漂着、漁業や観光に影響。政府関係省庁による初の対策会議(28日)

11月

- ・ユニセフの調査報告書「Seen, Counted and Included」、障害のある子どもの数は世界全体で2.4億人。幸福度に関するほとんどの指標において不利な状況にあることを明示(10日)
- ・COP26閉幕。CO2削減へ向け進展はあったものの未合意の課題多数(13日)
- ・新型コロナウイルスの変異株「オミクロン株」の感染者を日本で初めて確認(30日)*

12月

- ・米国中西部・南部で竜巻が相次ぎ発生。死傷者多数。史上最大級の被害(10〜11日)
- ・政府、「こども家庭庁」の創設に向けた「こども政策の新たな推進体制に関する基本方針」を閣議決定。「こども庁」からの名称変更に関する疑問や反対の声も(21日)
- ・米国、ウイグル強制労働防止法成立。中国新疆ウイグル自治区からの輸入を原則禁止(23日)
- ・アムネスティ・インターナショナル香港支部等閉鎖。国家安全法で活動が困難に(月末)

シンポジウム「これからのボランティア・市民活動
〜コロナ後の新たな展開へ〜」を開催

新型コロナウイルス感染症による社会への影響は多岐にわたり、市民生活は大きく様変わりしました。あらゆる人が生きる場を失わないために「つながり、つどう」

ことが大きな目標の一つであるボランティア・市民活動も、大きな困難と向き合うことを余儀なくされました。しかし、さまざまな工夫をしながら多くの活動が再開し、また新たな活動も生まれています。

東京ボランティア・市民活動センター運営委員会は2021年1月、コロナ禍が始まって約1年を振り返り、シンポジウム「コロナ禍とボランティア活動」を開催、

情報提供や活動報告を行い、取り組みの共有や検討をする貴重な機会となりました。そして、1年後、「これからのボランティア・市民活動〜コロナ後の新たな展開へ〜」と題し、運営委員会企画シン

ポジウム2022を1月23日に開催しました。遠方の方や高校生など、113名の参加者を迎え、運営委員長の渡戸一郎さんから「市

民活動を進めるための有意義な意見交換と情報交換の場としたい」という開会のあいさつでスタート

しました。

■ 課題提起

石渡和美さん

(東洋英和女学院大学名誉教授)

石渡さんは、ボランティア・市民活動のキーワード「出会う・つながる・ふれあう」がすべて制約されたという課題の一方で、障害当事者からの「コロナが蔓延する前から、そうした生活を強いられしてきた人々がいる」(障害の)社会モデルの観点からすると「総障害者化」(全員が障害者が起きた)といった発信について紹介しました。

そして、「多様な人がいるからこそ、新しい展開が実現できる」とし、「当事者と展開するボランティア活動の意義」や「共生社会の実現」、「ふれあいの回復」を提起しました。

■ 報告

吉田建治さん

(NPO法人日本NPOセンター)

同センターが事務局となり設立した、NPOを支援していくためのプラットフォーム「新型コロナウイルスNPO支援組織社会連帯」では、NPOへの情報提供やNPO支援者間の情報の共有、政策提言などをしてきました。

吉田さんは、2020年6月

に行った調査から、情報提供や提言など実際に行った支援活動と、支援者自身がNPOにとって有効だったと感じている活動とのギャップを指摘するなどし、「課題の意味することを慎重に読み解き、自分たちがどうあるべきか考え続けることが大切」と言います。

■ 活動現場からの提起

● 学生の想いと活動は？

橋谷優希さん(明星大学3年生)

畑野理美さん(明星大学ボランティアセンター)

今年度、一部の授業は対面で受けられ、学生同士が交流できる機会も持て、ボランティア活動もオ

ンラインを活用したミーティングや活動を行い、規制緩和の時期には、地域や子ども向けの活動ができたそうです。一方で、課題として部活動やサークル活動の多くが停止し、他大学の学生との交流の機会がないことを挙げました。「今できることを考えつつ、新しいボランティア活動を生み出すことが必要。コロナ以前を知っている自分たち3年生がこれからの活動を見守りたい」と橋谷さんは言います。

畑野さんからは「活動できない状況を懸念した卒業生が連絡をくれ、つながりが再開するなどプラスの面もあった。つながりを絶やさず、少数数でも続けることが大切」というお話がありました。

● 野宿者・失業支援の現場から

中村光男さん(企業組合あつん)

「我々は典型的なFace to Faceの活動」と開口一番、中村さんは言います。「皆で力を合わせれば何とか生きることができると思っていたが、コロナ禍ではいかんともしがたい。生活困窮者やホームレスの人が爆発的に増え、シングルマザーなどからも食べ物の依頼がある。自分たちが対応できるの

は100世帯程度。募集すると1分しないうちに埋まってしまっ。この背景には、2000万人以上といわれる非正規雇用問題があり、危機の時に社会の矛盾を背負わされる」

あうんでは、現在も対策を取りながら活動を継続し、並行して30〜40代の若手を中心に新たなプロジェクトを構想中とのことです。

● ことも食堂の現場から

近藤博子さん(一般社団法人ともしびatだんだん)

近藤さんが代表を務める子ども食堂は、八百屋から始まり、娘の学習支援のためワンコイン寺子屋をスタートしたことを機に始まりました。これまで、たくさんの人が関わり、だんだんを通じて人のつながりができていくそうです。コロナ禍では、長期休校対策のため、どんぶり弁当ランチ対応をし、給食の再開後も毎週木曜日に晩御飯のお弁当対応をしています。

「目の前の人を大事にする」「思いを行動にする」「人に頼ること大切」、そんなキーワードを提示していただきました。

● 多文化共生の現場から 栢木典子さん(NPO法人多文化共生センター東京)

同NPOでは、外国にルーツをもつ子どもたちの学習サポートを行っています。コロナ禍の影響として、外国の人たちは情報取得が一層困難になり、進学ガイダンスは予約制にしたため情報取得の人数が減った、入国制限でフリースクール生徒数も減少したこと等が話されました。それにに対し、SNS等で多言語の情報提供やオンラインによる学習支援をしています。

放課後教室を新規に開設し、大学生ボランティアと取り組んでいますが、学生が地域とつながる場になったら…と考えているそうです。

■ パネルディスカッション

これからのボランティア・市民活動

シンポジウムのコーディネーターである枝見太朗さん(一般財団法人富士福祉事業団)が司会を務め、まずは中野区社会福祉協議会と東京都生活文化局からの事例報告がありました。

○ 地域の居場所の活動状況について、中野区社会福祉協議会・草野由佳さんからの報告

コロナ前の2019年度、地域担当を通じて居場所は406か所確認ができたが、現在は約100団体休止・終了している。コロナ禍で高齢者の会食会が影響をもっとも受けていて、担い手の高齢化もあり、活動終了したところもある。活発なのは、子ども食堂や学習支援で工夫をしながら柔軟に活動をしている。

パネルディスカッションでは、

参加者から「世代交代」「ITが不得手な人の支援」「ボランティアの確保」などについて質問があ

がり、それぞれ具体的な回答がありました。

閉会時には、「一人ひとりだけがえのない存在であり、役割をもっている。支え合いながらできることをしていくことが、セーフティネットになる」といったお話がありました。

まだ、光は見えていないのかもしれない。けれども、ボランティア・市民活動に新しいともしびが起こりつつあることを、多くの方が実感したのではないのでしょうか。

これからのボランティア・市民活動
～コロナ後の新たな展開へ～
東京ボランティア・市民活動センター
運営委員会企画シンポジウム2022
日 時: 2022年1月23日(日)
14:00～16:30 (入場: 13:30-)
会 場: 東山町センターホール12階会議室
またはオンライン(ZOOM)参加
定 額: 会場は40名、オンラインは100名
申込: 無料 事前申込みが必要。
申込先: 東京ボランティア・市民活動センター 運営委員会事務局
〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1 東山町センタービル12階
TEL: 03-5221-1171 FAX: 03-5221-0030
Eメール: info@volunteer.or.jp
このシンポジウムは、東京都生活文化局と連携して開催されています。

シンポジウムは、市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO2022のプレ企画として開催された。

「災害時のための市民協働 東京憲章」を
読み解く

■東京憲章作成の経緯

近年、災害が頻発しています。こ
こ東京でも2013年には伊豆大島
土砂災害、2019年には台風15号・
19号が発生し、都内各地で被害が発
生しました。皆さんも記憶に新しい
のではないかと思います。そして、
今後発生が予測されている首都直下
地震や江東5区での大規模水害。こ
うした大規模な災害に我々、ボラン
ティアやボランティア・市民活動団
体は、どのように備えをしていけば
よいのでしょうか。

こうした問いに向き合って作成し
てきたのが「災害時のための市民協
働 東京憲章」（以下、東京憲章）で
す。平時から様々な団体が連携・協
働した取組みを実施することで、被
災者の「いのち」と「くらし」を守る。



このことを目標に、東京の災害ボラ
ンティア・NPOのネットワーク「東
京都災害ボランティアセンターアク
ションプラン推進会議」（事務局T
VAC）が作成しました。

今号から数回に分けて、この東京
憲章の内容とそのエッセンスをご案
内していきたいと思えます。

災害の発生前、そして、発災後
ボランティアやボランティア・市民
活動団体は、何を指して取組みを
進めていけばよいのか。実は、これ
だけ災害が頻発していながら、この
問いに直接的に答えられる資料は見
当たりませんでした。

■これまでの災害の教訓・
反省をもとに作成

東京憲章は、これまでの災害から
得られた教訓・反省から生まれました。

もちろん、東京憲章以外にも過去
の教訓・反省から生まれたガイドラ
インは幾つもあります。例えば、国
際協力の分野では、人道支援の現場
において支援者が守るべき最低基準
として「スフィア・スタンダード」

や人道支援の質と説明責任に関する
基準（CHS）というものが整理さ
れてきています。これらは専門的な
知見から災害時に必要な視点や被災
者支援に必要な基準を示しており、
とても重要なものです。しかし、一
般市民や被災者支援を専門としてい
ない団体がこうした資料を読み解い
ていくことは容易ではなく、海外向
けであることも相まってやや専門的
な印象を受けます。

また、国内においても被災者支援
の重要な視点を記したガイドライン
があり、これらも参考にしました。
一方、これらは発災後の支援活動に
焦点が置かれているものが多く、発
災前の平時に、どのような視点で取
り組んでいかなければいけないか、
という点においては知見がまとまっ
ていない状態でした。東京憲章はこ
うした幾つかのガイドライン、そし
て、この東京で経験した災害で得ら
れた様々な教訓・反省をもとに作成
しています。

東京は多様性に富んだまちです。
東京のまちの特徴をどのように捉
え、その良さを最大限に生かして一
人でも多くの方と、日ごろからの災
害時に向けた活動に生かしていく
か、東京憲章はそのチャレンジへの
礎づくりとも言えます。

■2つの視点と5つの基本方針

東京憲章は2つの視点と5つの基
本方針で構成されています。

◆大切にしたい2つの視点

- ①多様性
- ②平時からの取組み

◆5つの基本方針

- ①被災者一人ひとりの尊厳を尊重
します。
- ②支援や配慮が必要な方々に寄り
添い、「いのち」と「くらし」を、
みんなで支えます。
- ③支援者は、情報を交換し、とも
に支援活動に取り組みます。
- ④支援者となる方々へのサポート
も重要な支援の一つとして取り
組みます。
- ⑤過去の被災の教訓から学び、平
時・災害時の活動に活かします。

次号からは、大切にしたい2つの
視点と5つの基本方針についてご紹
介していきます。

賛同団体求む！

東京憲章に賛同する
団体を求めています。
賛同いただける場合
は下記サイト内に記
載のフォームより入力
をお願いします。



つぶやき ブレイク

vol.21



*当センタースタッフによるコラム



(左)『イヌは愛である 「最良の友」の科学』クライブ・ウィン(著)・梅田智世(訳)／早川書房 (右下)『動物の絵 日本とヨーロッパ ふしぎ・かわいい・へそまがり』府中市美術館(編・著) 講談社

人とイヌの出会い、その共生の歴史。それは「愛」と呼べるものかもしれない。
—— 菊水隆史 ——

※左の書籍は府中市美術館の展示品です。イヌの科学の第一人者が解説しています。

やっぱり動物が好き

2月はとても忙しい。なぜなら、親友の誕生日や母の誕生日、バレンタインデーと愛や感謝を伝える月だからである。とは言え私が愛情を注ぐ一番は、なんと言っても犬である。どうしてこんなに犬が好きなのか色々考えてみるが、はっきりしたことはわからない。そもそも愛を注ぎたい相手というのは、明確な理由や言葉で表現できる類のものではないのかもしれない。

私がそして人間が、これほどまでに犬に惹かれてしまう理由を知る手がかりが、この『イヌは愛である』だ。

著者である動物心理学者は言う「この惑星に生きる数かぎりない動物のなかでも、イヌほど人間とのあいだに強く不思議な絆を築く種はいない。」と。そして科学者としての葛藤が始まる。「イヌを愛する人の多くはこの『愛』という言葉を何気なく使っているし、わたしもプライベートではずっと同じようにしてきた。けれど、ひとりの科学者としては、その言葉をそれほど簡単に使うわけにはいかなかった。」、「愛」という概念は、わたしが属する現実主義の世界ではあまりにも感傷的であまいなものに見なされている。」

葛藤は「愛」を扱うことだけではなく、「擬人化」や研究を進めれば進めるほど想定とは異なる事実の発見、それによって、犬たちの認知能力を疑う者、という悪評、当の犬たちを貶めているようにみられてしまうことにも及ぶ。犬を愛する者としては、とても辛い立場に追いやりながらも、知能が特に優れているわけではない。イヌにはたしかに特別な何かがある、と奮闘する。そして、その特別な何かとは知能ではなく感情にあるのではないかと気づき、犬と人間の「愛」について迫っていく。「愛」については難しい命題だが少なくともお互いを思いやる気持ちや相手の幸せを願う気持ち、安らかな一体感がそれなのではないかと思う。

「イヌの愛情に敬意を払って報いるために、わたしたち人間にはもっとするべきことがある。」

「愛こそが、あの関係の、そしてほぼすべてのイヌと人間の交流の本質なのだ。研究者たちが見当違いの場所をつつき、イヌの特殊性は心ではなく知能にあると主張していたころからずっと、イヌを愛する大勢の人たちは、その真実を知っていた。科学がいまようやく、それに追いついていくとしてい



る。」という文章に「よく言ってくれました」と称賛を送りたい。社会では、見当違いの場所をつつき、行き過ぎた能力主義や条件付きの命の選別が存在する。全ての動物には命があり感情があることを忘れてはならない。愛するための努力と温かさを大切にしたいと強く思う一冊であった。

最後にもう一冊、図録を紹介したい。コロナ禍で美術展が中止・時間短縮となっている中、滑りこみで観た府中市美術館、開館20周年記念「動物の絵 日本とヨーロッパ ふしぎ・かわいい・へそまがり」。尾形光琳の竹虎図、円山応挙の藤花狗子図、徳川家光のユニークな兎図などが鑑賞できる。「癒される」の一冊だ。

(安井忍)

東京ボランティア・市民活動センター40周年スペシャル

変わりゆく社会とボランティア・市民活動 PART 2

市民活動の現場から社会の変化をみつめる企画第2弾。今号は全国音訳ボランティアネットワーク代表の藤田晶子さんにお話をうかがいました。

インタビュー

音訳を通して社会を変えよう 視覚障害のある方に寄り添い続けて

藤田 晶子（全国音訳ボランティアネットワーク代表）

そもそも「音訳」とは音声訳の略。文字や図表などの情報を音声化して視覚障害者の「目の代わり」を果たすことを目的としていました。日本における音訳の活動は1957年に始まりました。

音訳の活動との出会い

まずは、私自身のことからお話すると、学生時代、選挙の宣伝カーに乗り車上運動員（いわゆるウグイス嬢）をしたことが音訳ボランティアの活動にかかわるきっかけでした。発音や発声を叩き込まれ、声が枯れない話し方や、遠くにいる人にも声を届ける基礎訓練を受けました。そ

の後、地域の図書館主催の音訳者養成講座に参加しましたが、初心者の中で声を出すことは私が一番上手で、自分の声で視覚障害者の方々の役に立てるんだ、とその時に思いました。

しばらくして練馬区で活動する音訳ボランティアグループに入り、著作権の係になりました。当時は点字図書館に属するグループなどを除き、1冊ごとに著作権の許諾を取らないと録音ができなかったのですが、その手続きにはたいへんな手間がかかりました。

当時東海テレビにいらした磯野正典さん（*1）が中心となって、出版する本の裏表紙にEYEマークをつけ

てもらおうと許諾なしに読めるという運動がありました。視覚障害者の方に1日も早く音訳を届けたいという思いから、私もかかわっていました。時間は要しましたが、多くの方の努力のおかげで、著作権法が改正され、2020年の読書バリアフリー法（*2）の成立に結びついたのです。

私たちは、図書館や視覚障害者の方から依頼を受けて、おもに録音図書を製作しています。そもそも音訳は時間がかかるので、すでに音声のある場合にはそちらを案内します。基本的には1冊の本を1人で読み、雑誌は早く渡す必要があるために分担します。たとえば、月刊誌『世界』は8グループで分担して読み編集しています。出来上がったものは電子図書館サピエ（*3）にアップされ、より多くの方がアクセスできるようにします。今は音声デイジー（*4）というものをつくっています。

分冊すると早いのですが、文芸書などは読む人によってイメージが変わるため、1人で読んだ方がいいだろうと思います。俳優さんの朗読は「すごい！」と思うけれど、視覚障害者の方にとっては重く感じたりもします。読み手が感動して感情を込

めて読んで、全ての人が同じ箇所に感動するとは限らないのです。

全国の音訳ボランティアがつながる

音訳ボランティアの全国的なつながりができるのは、2000年代に入ってからです。それまでは横のつながりが少なく、情報が手に入りにくい人たちが多くいました。ある年の全国図書館大会で各地の音訳ボランティアと出会ったのを機に、音訳ボランティアの全国大会を開きました。2006年のことです。800人も参加があり、翌年に全国音訳ボランティアネットワークを設立しました。総会は隔年で開催しています。地方の方からの音訳の依頼には地元グループにつないだり、漫画が読みたいという依頼には漫画を読むグループを紹介したりといったこ



藤田 晶子（ふじた まさこ）さん

ともしています。

ニースの広がりに対応する

今でも、朗読は知っていても、音訳は知らないという方がほとんどではないでしょうか。音訳は朗読とは一線を画し、アナウンサーがニュースを読むように感情を入れないのが通常でした。けれども、最近は、淡々と読まれても、おもしろくもおかしくもないと言う声を聞くようになりました。実際のところ、視覚障害者の方々に人気のある時代小説は会話がが多く、老若男女くらいはわかるように読まないとおもしろみがないだろうと思います。さらに、音訳の対象がディスレクシア^(*)や肢体不自由、寝たきりの方なども含まれることになりました。そうした方々にとっては、メリハリをつけて読むほうが楽しめるでしょう。音訳があるだけでありがたかった時代から、「こう読んでほしい」と言える時代になったのです。

また、大学への進学や就労する人が増えて、専門書や教科書、参考書を読んでもほしいという要望も受けるようになりました。中身を理解して読まないと伝わるものにはなりません。

それから、早く読みたいからテキストを合成音声^(*)で読むという人たちが出てきました。中途失明の方たちは点字を覚えるのは至難の業で、進学や就職の準備のために、音訳を待つては間に合わない。また、「ベストセラーのうちに読んで、友達と話したい」といったご要望もあります。これも時代の流れだと思います。

私たちは声を使って情報を伝える活動をしています。リクエストに応じてテキスト化にも取り組んできました。東日本大震災の直後に、省庁からの日々更新される原発や震災に関する情報が合成音声では読み上げられないと、悲痛な声が寄せられたのがきっかけでした。

音訳を通して伝えていきたい

障害者向けのサービスを提供する公共図書館はひと握りですし、電子図書館の仕組みは、操作が難しく音源をダウンロードできる人が限られたり、音声デジジーには専用の再生機が必要だったり、目の前には課題がたくさんあるのが現状です。

今朝、テレビをみていたらAIのアナウンサーがニュースを滑らかに読んでいて進化を感じました。肉声による音訳が必要なくなるのなら、それでもいいと思っています。けれども、子どもたちには肉声による温かみのあるきれいな日本語を伝えていきたいという想いから、「子どもの本棚」という児童書を読むプロジェクトにとりかかっています。

障害がある人たちは特別ではないということが当たり前の社会にしていくために、私たちは音訳を通してできることをしていきたいと思えます。

註

*1 磯野正典(いそのまさふみ)・・・情報学、社会学が専門の社会学者。金城学院大学教授。EYEMARK・音声訳推進協議会(1992年結成)の理事長を務めた。

*2 読書バリアフリー法・・・視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する法律。さまざまな障害のある方が利用しやすい形式で本の内容にアクセスできるようにすることを目指す。

*3 電子図書館サピエ・・・視覚障害者等、目で文字を読むことが困難な方々に対してさまざまな情報を点字、音声データなどで提供するネットワーク。日本点字図書館がシステムを管理し全国視覚障害者情報提供施設協会が

運営する。

*4 音声デジジー(DAISY)・・・Digital Accessible Information Systemの略。「アクセシブルな情報システム」と訳されるデジタル録音図書の国際標準規格。カセットテープに代わるものとして開発され1枚のCDにカセットテープ約50巻分の録音が可能。

*5 ディスレクシア・・・学習障害のひとつで文字の読み書きに限定した困難があり学業不振や二次的な学校不適応などが生じる疾患。

*6 合成音声・・・コンピューターを用いて人間の音声・言葉を機械的に合成すること。

全国音訳ボランティアネットワーク

2007年6月設立。全国の音訳活動に携わる個人・団体のネットワークを構築し視覚障害者等への支援活動を行う。個人会員215・団体会員180(2021年1月現在)。



全国音訳ボランティアネットワーク

セルフヘルプ という力³⁰

当事者の歩み編

何もわからなかった時はひたすらつらかった

～DVや虐待は身体的暴力だけじゃない～

セルフヘルプ・当事者活動は、生きづらさや困難・悩みを抱える人、同じ経験をした人やその家族などが「ひとりじゃない」と実感でき、仲間や社会とつながりを持つ活動です。「当事者の歩み編」では、さまざまな経験や状況を生きる方々の個人の歩みをうかがいました。

加納由絵さん

さまざまな事情があった家庭で育ち、今でも、心のどこかに「生きづらい」複雑な思いを抱えて過ごしている当事者のあつまりを開いている加納由絵さんにお話をうかがいました。

自分のせい？誰のせい？

私の両親は共に交通遺児で、シングルマザー家庭で苦勞して育ちました。戦争をまたいだこともあり、二人とも心にいろいろな傷を負っている状態だと気づかず、私の親になつたようです。父は感情のコントロールができない人で、母はコンプレックスや劣等感が強く、私は母の自慢の娘であることを求められ続けました。母の決まり文句は「みっともない」と「お里が知れる」でした。その状態の中で、私は、何を判断するにも親の信念や価値観が基準で、自分が思ったことをストレートに出すことなど考えることもできませんでした。



父の機嫌がいつ悪くなるかわからないので、家族皆、父の様子を軸にして考えることが習慣になっていました。常に重たくて、いつも誰かに圧力をかけられているような状態でした。進路も親が決めていて、私の志望校の願書は目の前で父に破り捨てられました。親が望んだ通りに生きる以外に、意思決定や自己主張などできない状態は成人しても続きました。

私が楽になれたきっかけは、自分の中で何が起きていたのか、いろいろな情報を手に入れる機会を得られたことです。それまでは、すべて自分の責任なのだという気持ちがあるに強く、自分のことを客観的に見られる情報がありませんでした。何も知らない時は、ひたすら辛かったです。なぜ自分が辛くなったのかを考えられるようになり、少しずつ環境に視野を広げられるようになりました。そうすると自分が辛

題なのではないかと意識するようになりました。そこから少しずつ楽になりました。

最初は、この辛さの根拠がわかりませんでした。親との楽しかった思い出もありましたし、親の努力も見ていたので、その辺の折り合いがつかなかったのです。家庭内のハラスメントに関する情報を知るうちに、私たちが家族がたどってきた歴史や全体の文脈がわかってくると、これまでの自分を労うこともできるようになりました。ですので「正しい情報を得ることができると、楽になれますよ」とお伝えしたいです。

なかったのは、家族の誰もケアを受けられないまま、なんとかしようとして、それぞれが必死で生きていたことが原因だったと気づきました。親の子ども時代もいろいろあったのだなとか、そういう親たちを誰も助けてくれなかった、親も支えてもらえてなかったのだなど。これは家庭の問題ではなく、社会構造上の問

不思議なことに、親から唯一何も言われなかったのが結婚相手でした。夫は、暴力や虐待とは、縁遠い家庭で育った人で、最初はこの人は、何て話が通じない人なのだと、かなりイライラしました(笑)。私のつらさの話が全然通じてない。そのうちに「そんなことわからない」という返事を、段々心地良く感じている自分に気づかされました。理解されなくても構わないのかもしれないと思うようになりました。それまでは「わかってもらえないと安心できない」と思っていました。相手に辛さについて理解されてもされなくても、それは安心とは無関係であること、安心できる人となら、安全と安

心は無条件で得られることを実感させてもらいました。そのことに気付ける家庭と家族を持たせてくれた夫には、本当に感謝です。

安全のために自分をつくっていく

負けてはいけないという変な自意識がありました。人から、どう思われているだろうと、ずっと探って、その空気感の中で、そこに見合う自分を作ろうと必死でした。相手が自分をどう受け取っているだろうというのに、とても神経質で。その場に適した自分を上手に作れてそこにいられると安心できました。「受け容れられたい」、「弾かれたくない」、「これ以上傷つきたくない」という思いが、とても強かったように思います。その頃は、自分の中にどういう欲求があるのかわかりませんでした。自分がいかにそこで安全にいるか、ということだけにフォーカスしていました。

20歳くらいの時に、たまたま見つけた本で、私の生きづらさには、名前があるのだと知りました。最初に知ったのは、「アダルトチルドレン」。「ああ、こういうことを辛いつて言うのか」と気がついたのが、情報というものに触れた最初の経験です。

私と同じような経験をした人と

会っても、初めの頃は、どうせ絶対無理だという思い込みがありました。「この人は違う、私の経験は、この人は経験してない、だから私の気持ちが変わる訳が無い」と。相手と自分との共通点と相違点を探していることが長かったです。でも自分の気持ちが落ち着いてきたら、みんな違うのが当たり前で、まったく同じな方が妙でしょ？とわかるようになります。それまでには、かなりの時間がかかりました。今は、人との違いを感じても、不安や妙なみじめさや苛立ち、寂しさを感じることはなくなりました。

痛みを知っているからこそ上手く届けたい

父はもう他界していますが、昔と今で、母と私との関係に何か変化があるとしたら、母に対して、「この人もいろいろあったのだな」、「あなたはそのような人よね」と、そのままの母を、適度な距離感で受け流せるようになったことでしょうか。心理的な境界線を設けることができるようになったと感じています。今でも母とのやり取りの中で、イラっとすることはありますが、自分の受け取り方が変わると出来事の意味自体も

自然と変わりますね。今は、そのことに対して、あいかわらず面倒だなと思うことはあっても、辛いと感じることにはなくなりました。

外見からだけではわからない、家庭内のハラスメントや暴力的な圧力の話は、人によっては、侮辱や否定だと誤解して受け取られることもあり、どのようにお伝えしたらいいのかと苦慮することもあります。当事者が世の中に対して、理解して欲しいけれど、安っぽい同情はやめて欲しいと思うのは、そうした社会からの無理解に晒されてきた家庭内のハラスメント被害者の心の傷痕なのだと思います。世の中に適切に情報を拡げる以外に、こうした苦しみから当事者が抜け出せる方法は無いのかなと思っっています。トラウマインフォームドケアという意識ですね。みなさん、DVや虐待は、身体的な暴力を受けて、警察や児童相談所が介入するような特別なことだと思っっているように感じます。最近の世の中は、虐待という言葉を出した途端に、妙に身構えてしまう。ですからマスメディアにも報道のあり方について、もつと当事者やその家族の将来や社会全体に対して、適切なメッセージを届けて欲しいと切に願っています。

私のように、家庭内の無言の圧力

や、張りつめた緊張感の中で育ってきた人たちはたくさんいます。でも、外からわかりにくい、見えづらいで、児童虐待防止法も、そのような、現在や過去の子どもたちを守ってはくれません。それによって今も抱えている様々な困難について、すべては家庭と本人の自己責任になってしまふ。虐待は子どもを保護すれば終わりだと思っっている方が多いように思います。実はそこから先が本当に大切なのだということに気がついていただけるといいなと思います。あとは、人生の中で立ち止まって、安心して自分について振り返ってみたり、安心して一休みできる時期を誰もが受け取れる社会の空気があればいいのと思っっています。

森玲子（相談担当）
安井忍（相談担当）



イラスト フローラル信子

読者の声

～本誌375号より～

読者の皆さんからいただいたアンケートの一部をご紹介します。

◆【特集】「市民活動を応援する助成金」

・共同募金の助成内容や仕組み、中央共募の活動の変遷、いろいろな新しい取り組みに挑戦されてきたことなど、初めて知ることが多くあり、興味深く読みました。

◆【特集】「パルシステム東京 市民活動助成基金」

・使い勝手がよく組合員にも見える形で助成基金が運用されているのは、とてもよいことだと感じました。

◆【特集】「世田谷まちづくりファンド 『つながりラボ部門』」

・助成金に関してとても新しい取り組みだと思いました。「具体的な場所を拠点とすることの力強さ、自由な試行錯誤の可能性を信じた」という点に納得です。今後の助成金のあり方のひとつのモデルとして期待が持てます。

◆【特集】「オラクル有志の会 ボランティア基金」

・公益信託の仕組みについて知ることができました。基金立ち上げも、多くの方の気持ちのつながりもすごいことだし、励まされます。人件費や家賃などにも柔軟に活用でき、本

来の活動が圧迫されるほど申請書や報告書に労力が取られ過ぎることなく、組織そのものを応援してくれるような助成がもっと増えてほしいです。

◆あすマネ

・全ページの中で、一番、興味を持ちました。特集と連動しているのもよかったです。特集と連動しているのもよかったです。むしろ、あすマネを巻頭に置いて、ここに書いてあることが実際に、どのように行われているのかという具体例が5、6件紹介されていたら、とても面白い特集になったのではと思いました。

◆いいものみ〜つけた！

・SDGsにもつながる手仕事。時間をかけ表現しながらつくり上げた作品。この視点に感銘を受けた。購入者はその価値観を問われると思う。毎回読みやすくかつ興味をそそられる内容で、次も楽しみです。

お気軽にご意見・ご感想をお寄せください。



東京ボランティア・市民活動センター

(TVAC: Tokyo Voluntary Action Center)

<http://www.tvac.or.jp>

東京ボランティア・市民活動センターは、ボランティア活動をはじめとするさまざまな市民の活動を推進・支援しています。どうぞご利用ください。

利用

*ご利用人数はホームページでご確認ください。

会議室	会議室A・B(各40人)・C(15人) 無料 ※会議室AB通し(80人)
貸出機材	印刷機(2台)紙持ち込み、点字プリンター 他
申込み	4ヶ月前から電話で受付(03-3235-1171)

情報提供

最新のボランティア・市民活動情報は、センターのホームページでご覧いただけます。<http://www.tvac.or.jp/>

開所時間

*ホームページでご確認ください。

火曜日～土曜日: 9時～21時 / 日曜日: 9時～17時
(月・祝祭日・年末年始除く)

交通アクセス

JR、地下鉄(東西線・有楽町線・南北線・大江戸線 出口B2b)
飯田橋駅下車

ネットワーク

本誌のご案内は上、
バックナンバーにつ
いては下の二次元
バーコードからご覧
ください。



発行人 山崎美貴子

編集委員 五十嵐美奈(興望館)
上杉貴雅(オレンジフラッグ)
江尻京子(東京・多摩リサイクル市民連邦)
亀川悠太郎(葛飾区社会福祉協議会)
小池良実(岡さんのいえ TOMO)
齋藤啓子(武蔵野美術大学 造形学部教授)
社会学ゼミ(TDU-豊栄大学)
中原美香(NPOリスク・マネジメント・オフィス)
まつばらけい(フリーライター)
渡戸一郎(明星大学名誉教授)

編集・発行: 東京ボランティア・市民活動センター
〒162-0823 東京都新宿区神楽河岸1-1
セントラルプラザ10階
TEL: 03-3235-1171 FAX: 03-3235-0050
E-mail: nw@tvac.or.jp

印刷: (株)丸井工文社
デザイン: 東京ボランティア・市民活動センター / (株)丸井工文社
表紙イラスト: フローラル信子

2022年2月20日発行(通巻No.376)
ISBN 978-4-909393-33-3 C2036
定価 400円(本体364円+税10%)
本誌掲載記事の無断複製・転載を禁じます。



いいもの みい〜つけた!



このコーナーでは、ボランティア・市民活動・福祉施設のグッズや作品を紹介します。

Vol.
35

トントンメイドな 革工芸!

【あとリエトントン】は1987年、東大和市初の福祉作業所として誕生し、その後1990年に【第2あとリエトントン】が開所しました。精神疾患と向き合いながらも自分の居場所として利用者がいきいきと活動できる環境づくりを目指しています。革製品づくりは革の裁断から染色、縫製までの全工程を自分たちで行っており高度な技術が求められる作業ですが、一つ一つ丁寧に進めていくのがトントンの自慢です。カービングを活かしたトラディショナルラインから、POPな色使いが特徴的な革小物まで幅広いラインナップを揃えています。トントンメンバーが懸命に仕上げた革製品や出店情報、活動の様子はHPやInstagramからもご覧になれますのでぜひのぞいてみてくださいね。

1



NPO 法人生活支援センター 207 あとリエトントン・第2あとリエトントン

所在地 東京都東大和市南街 5-69-6 【TON1】

東京都東大和市向原 4-33-9-101 【TON2】

TEL 042-566-3920 【TON1】

042-566-4001 【TON2】

FAX 042-566-4413 【TON1】

042-567-4766 【TON2】

E-mail info@atonton.com 【TON1】

dai2@atonton.com 【TON2】

HP https://atonton.com



2

1 ラウンドファスナー財布。キャッシュレス時代にちょうど良いと大人気です。(横11cm×縦9.8cm×マチ1cm)

2 色合わせや装飾には作り手の個性が光ります。

3 ポップからシックまで、一品もの手作り感がうけてます。

4 トントンが誇るカービングの技術。染色にも手が込んでいます。



3



4

ボランティア・市民活動グループのみなさんへ

東京ボランティア・市民活動センターのホームページで、
ボランティアや寄付の募集、イベント情報の投稿ができます！

ボランティア・市民活動の総合情報サイト

ボラ市民ウェブ

by 東京ボランティア・市民活動センター

パソコンでも
スマートフォンでも
見られます♪

★まずは <https://www.tvac.or.jp/> へアクセス！

右のQRコードを読み取ると便利です

Yahoo! や Google 等で「ボラ市民ウェブ」と検索してもOK！

*ボラ市民ウェブは東京ボランティア・市民活動センターのホームページです。



ボラ市民ウェブでできること

参加者や寄付等を 募集する

- ・ボランティア募集
- ・スタッフ募集
- ・イベント参加者募集
- ・寄付募集
- ・グッズ購入者募集

情報を探す

- ・他の団体の情報
- ・助成金
- ・活動のヒント



情報投稿の手順は左のQRコードから♪
実際の情報投稿は右のQRコードから♪



この他にも、ボランティア・市民活動に役立つ様々な情報を掲載しています！

ISBN978-4-909393-33-3 C2036 ¥364E

ボランティア・市民活動を広げ、
応援する！

ネットワーク

2022年2月20日発行

2022年2月号

通巻376号

発行人

山崎美貴子

〒162-0823

東京都新宿区神楽河岸1-1

東京ボランティア市民活動センター

定価400円(本体364円+税10%)